

# 明日への幼児教育

— 新入園児を迎えて —



莊 司 雅 子

独逸のある哲学者のことばに「現在は過去を背負い、未来を包んでいる」というのがある。その意味は「今日」という現在は「昨日」という過去の続きであると同時に、「明日」という未来への出発をしているということである。四月に入園した幼児でいえば、今日新しく幼稚園教師の手に渡されたこれらの新入園児は、身体の発育といい、精神の発達といい、また性格や習慣の形成といい、いずれも昨日までの家庭と地域における人間関係のなかで、また社会や自然の環境のなかで、あるいは四、五年間生活している間に、つくられたものである。幼児期が如何に環境に影響されるかはフレーベルや心理学者のシュテルンもすでに指摘しているが、現代の幼児教育者ではすでに誰しも十分に理解しているであろう。要するに、人間は幼児から環境に影響されながら成長発達し

ている。ところが、幼児が、環境に影響されているということとは、いいかえれば幼児がその環境のなかで、いろいろのことを自分で経験していることでもある。だから環境の違いによって幼児の経験の内容も違ってくる。経験の程度によって身心の成長発達に個人差が生じてくる。そのうえ人間は、過去に経験した事柄をながく心に保つことができる。そしてそれを思い出して現在の経験に何かをつけ加えていくことができる。しかも過去をつけ加えた現在の経験は、更に未来の経験に加えられるのである。このように幼児の現在の一つの経験は、いつも過去からの経験の続きであり、それが未来の経験を規定していくのである。すなわち過去の経験が現在の生活を左右し、現在の経験は未来の生活を左右するといわれる。だから四月に新たに入った幼児が、現在の幼稚園

生活を、どの程度に経験するかは、各々の幼児の昨日までの生活に基づいており、また現在の幼稚園の生活や経験がすべて明日への生活や経験の基礎になることを、われわれ幼児教育者は忘れてはならないであらう。

右のことについては、アメリカの大教育思想家であるデューイも『哲学の改造』という書物のなかで次のようなことをいっている。人間が下等動物とちがうのは、自分の過去の経験を保持しているからである。過去に起こった事柄は、再び記憶のなかによみがえってくる。今日起こっている事柄には、過去に経験した似かよった事柄についてのいろいろな考えがつきまどっている。動物は、一つの経験はその場限りのものであって、新しくしたことや受けたことは、一つ一つ孤立している。しかし人間は、いちいちの出来事が、すでに起こった事柄の反響や想い出にみちた世界に住んでいる。その世界ではいちいちの出来事が他の事柄を想い出させるのである。だから人間は野獣のように、単に物理的な事柄だけの世界に住んでいるのではなくて、記号と象徴の世界に住んでいる。一個の石でも、それはただ単にそれに突きあたると堅いものであるというだけではなくて、今はなき祖先の記念碑である場合もある。火の焰もまた単に何物かをあたためたり、ある

いは燃やしたりするものではなくて、永遠に続く家庭生活の象徴であり、よるこびや栄養の、また人が思いがけないさすらいの旅から帰って避難する場所の、永遠の源泉を象徴するものでもある。焰はまた触れるとすぐに火傷するものではなくて、その前で祈りをあげる祭壇のいろりでもある。このような事柄はすべて獣性と人間性との相違、文化と自然との相違を明らかに示すものである。それも人間が記憶し、自分のいろいろな経験を保持し、記録にとどめていることができるからである。もちろんよびおこされた記憶が、もとの経験と正確に同じであることはあまりない。自然的に自分に興味のあるものを、またわれわれに興味をもたらすものを記憶するのである。しかも過去のことを想い起こすのは、現在何物かをつけ加えるからである。

以上のデューイの考えは今日われわれの幼児の生活や経験にもあてはまることである。現在の幼児のひとりひとりの過去の経験を、教育者がまずよく理解してから保育にあたると同時に、幼稚園における幼児の現在の一瞬間、一瞬間の経験が、明日への幼児の成長発達にかかわっていることを忘れなようにしたいものである。